【16】

氏名（本籍）	村上忠良（奈良県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博甲第 1,973 号
学位授与年月日	平成10年11月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	**上座仏教社会の儀礼と社会的威信** ータイ国北部のシャン仏教に関する人類学的研究

主　査	筑波大学教授	文学博士	牛島　巌
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	小野澤正喜
副　査	筑波大学助教授	Ph. D.	関根康正
副　査	筑波大学教授	文学博士	今井雅晴
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	池上良正

論文の内容の要旨

本論文は，タイ国北部のシャン族の仏教実践の構造を明らかにし，従来の上座仏教研究における僧俗二元論を中心とする枠組の限界を示しつつ，新たな分析枠組を提示している作品である。論文は，序章および，第1章～第8章の構成となっている。

序章「問題系の所在と本論文の構想」は，シャン族の仏教実践を検討する意義，および従来の上座仏教研究における理論的問題点を指摘し，本論文の基本的構想を提示している。従来の僧侶の宗教実践を中心に据えた研究の限界を指摘し，在家仏教徒に関わる儀礼体系を綿密に再検討する必要を説いている。

第1章「上座仏教研究の検討」は，従来の東南アジアの上座仏教研究が依拠する理論的前提を再検討し，それに代わる分析枠組を提示している。従来の研究では，宗教的エリートである僧が究極目標である「解脱」を追求し，大多数の在家信者はサンガ（僧の集団）を物質的に支援することによって功徳を積み，将来及び来世における救済を求めるとされてきた。この枠組によれば，僧の「解脱」志向と在家信者の「積善」志向の二つの異なる志向性があり，この二つの志向性が相互補完的な関係にあることによって，仏教社会が存続しているとされてきた。しかし，著者は，こうした枠組では，一時的に出家した後再び在家者に戻る「一時出家の慣行」に見られるように，宗教的な禁欲生活と世俗的な宗教生活が一人の人間において実現しているシャン仏教徒の日常的な宗教実践を解明する上で限界があると主張する。シャン仏教においては，持戒に代表される「禁欲的自己修練」の系列と，供物や布施の「喜捨行」の系列が存在し，僧俗の区別なく共に二つの系列の宗教実践を行っている実態が解明される必要性を説いている。

第2章「シャンをとりまく民族と国家」は，東南アジア大陸部の各地に分布するタイ系諸族の一集団であるシャンの民族史を検討し，これにより本研究の調査地であるタイ国北部メーホンソーン県の社会的状況とその内部的構造の変化を論述している。即ち，シャン社会の現状は，伝統的な政治体制における辺境地域から近代的な国民国家の国境地域へと編入される過程にあることを指摘している。

第3章「村落宗教体系の複合性」は，そうした社会変化に対応して，村落レベルにおける宗教体系はより複合化の度合を強め，その体系内における仏教的価値が優位性を持ちつつあることを論じている。シャンの村落には，一般に作物の豊穣と安寧に関わる守護霊の祭祀と寺院を中心とした仏教実践という二元的な宗教体系が存在するが，開拓の歴史が長く大規模な村落の類型に属する調査地では，仏教が精霊信仰を影響下におき，宗教実践上仏

教の優越性がみられることを指摘している。

第4章「仏教実践の諸類型」は，まずシャン仏教における実践形態の分析から，「禁欲的自己修練」と「喜捨行」という二つの実践の系列を抽出する。その上で，これまで僧俗間の「解脱」と「積善」という二つの志向性の価値交換の場として捉えられてきた仏教儀礼を，僧俗共に「禁欲」と「喜捨」の両方を実践する場として設定しなおし，さらにこの2つの系列に「個人的儀礼」と「共同的儀礼」という二つの基準を加えて4類型に整理し，より包括的な体系の中に捉え直している。

以下，第5章から第7章では，この包括的な体系の捉え直しを下に，儀礼によってなされる社会関係の創出について検討している。

第5章「シャン仏教における一時出家慣行」は，見習僧の出家式を親子両方にとっての通過儀礼として捉え，儀礼を通じた社会的地位の変化を分析している。この分析を踏まえて，シャン出家式は，村の共同的喜捨行為であると同時に，儀礼の主宰者が名誉を獲得する個人的行為であることに注目する。こうした出家式の過程の検討を通じて社会的威信の多様な質とその生成のメカニズムを解明している。

第6章『ポーイ・サーンローン』は，一時出家慣行の柱をなす出家式の詳細な観察記録をもとに，見習僧の出家式において通過儀礼のプロセスが典型的に示されることを論述している。時系列的に変化する出家志願者の地位が，その剃髪や外装の変化によって可視的に表現されることなど，儀礼的行為の持つ意味を分析し，そこから儀礼に参加する立場の違いによる多様な意味の付与がなされていることを指摘している。

第7章「仏教儀礼と社会関係」は，メーホンソーン県のシャン社会における儀礼が持つ社会的意味に関する総括的な検討を行っている。仏教儀礼は功徳の獲得のために行われるが，この功徳は単に将来，来世における救済に関わる機能とは別に，現実の社会関係における機能を持つとしている。出家式によって形成される儀礼的な「出家の親子」関係が，擬制的親子関係を成立させていること，出家式を主催することによって社会的威信を獲得できること，「出家の親子」関係が外部者のシャン社会への参与の回路となることなどの社会的意味を明らかにしている。

結論となる第8章「シャン仏教儀礼体系の特性」は，「禁欲的自己修練」と「喜捨行」の二系列を軸とした包括的な分析枠組の有効性を論じている。シャン社会における仏教実践の特徴として提出された二系列は，僧俗の区別なく実践されているが，いずれも実践の到達度によって測られる階層的秩序をなしている。そのため，年齢階層別，性別，宗教的役割等に応じて多様な達成目標が設定でき，その結果，個々の儀礼は関与する社会層ごとに多様な意味を持つ場となっており，獲得された宗教的価値が社会的威信に転化する過程が見られる，と結ばれる。

審査の結果の要旨

本論文は，長期にわたる現地調査を基礎にして得られた資料にもとづき，仏教徒シャン族社会における諸儀礼について詳細な論考を提供しているものである。理論面では従来の上座仏教研究が僧侶の宗教実践を中心対象に進めてきた結果，教義研究の枠内に留まり，在家仏教徒を含む宗教実践の全体構造を解明しきれていない限界を指摘し，調査法および解釈の枠組に関して根本的な変更を求めたものになっている。

本論文が上座仏教の人類学的研究に貢献しえる要点は，以下の諸点にある。

1．従来の上座仏教社会研究の前提として受入れられてきた，僧の「解脱志向」と在家信者の「積善志向」が相互補完的な関係にあることによって仏教社会が存続しているとする分析枠組を根底から問い直していること。

2．現実のシャン仏教実践においては僧俗を問わず，「禁欲的自己修練」と「喜捨行」という二つの系列の実践を行っていることを指摘し，それを包括的に捉える分析枠組を提示していること。

3．集合的な仏教儀礼において獲得された功徳が社会的威信に転化するメカニズムを実証的に分析していること。

4．出家式に見られる擬制的親子関係に着目し，仏教儀礼のもつ重要な側面である獲得的な人間関係を構築させる機能に関して分析を進めていること。

5．集合的な仏教儀礼の参加者が多民族的構成になっていることに着目して，仏教儀礼の場が多義的な解釈を許す開放性を有するとの議論を展開していること。

上記のような特長をもつ一方，以下のような課題を今後に残している点が指摘できる。

1．本論文で展開された新たな分析の枠組は説得力を持ち新たな分析方法として注目されるが，シャン族以外の上座仏教社会の事例において綿密な検証を受ける必要がある。

2．本論文における宗教的救済と社会的威信に関わる斬新な問題提起は高く評価されるが，ここで提起された枠組みが仏教思想史の上にどのように位置付けられうるか，という課題が今後残されている。

本論文は，上記のような残された課題はあるが，長期にわたる現地調査に基づきシャン仏教社会における宗教実践の構造に関してなされた周到な論考として十分独創性があり，学界に一つの地歩を占めうるものと認められる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。